

Eureka XII

六年制通信 No.7 令和6年5月17日(金)号

行動の基礎

ゴジラー1.0を観ました。私はトカゲの大きくなったのより猿亀蛾つまりキング・コングおよびガメラ並びにモスラの方が好きなので別にそんなに面白いとも思いませんでしたが、途中で元海軍の将校が「未曾有」をはっきりと「みぞーう」と発音していてがっかりしました。戦後すぐの元将校なら当時のエリートのはずですから、そんな発音は絶対しないでしょうに。前に書いた「思い込み」は映画製作にもあるようです。もっとも現代では「みぞーう」を容認している辞書もありますが（「みぞーゆー」は今でもダメです）、昔の人は「ミゾオ」と発音していたはず。いや、これも私の思い込みなのかな。ま、老人の繰り言です、はい。

さて、先日若い先生方に「行動の基礎」について話す機会がありました。本校に学ぶ君たちにも大いに関係のある事なので、少しお話ししましょう。私たちは毎日ほとんど数えきれないくらい行動を「選択して」生きています。基本は何事をするかしないかの二択ですよ。無意識に行っているルーティンワークもあるでしょうが、普通はちゃんと選択して行動（言動と言ってもいいでしょう）しているはずです。その際なぜ自分はそのような行動をとったのか、あるいはとろうとしたのか、それが自分でわかっていないといけません。行動の基礎がはっきりしていないと大きなミスをしてしまいます。行動の基礎となるもの、それは自分がどちらを選択するかの指標となるものです。私たちの場合、教職員も生徒諸君もともにはっきりと理解している「了解事項」のことですね。それは「四大綱」であり、六年制の諸君はそれに加えて「辛抱強く学ぶ姿勢を身につけること」です。ここから外れてはいけません。選択に迷ったらルールを守り、ベストを尽くし、チームワークをつくり、相手に敬意を持って行動する方を選び、その一つ一つの行動は君が辛抱強く学ぶ姿勢を身につけることに繋がっているのかどうかを見極めなくてはなりません。繋がっていれば六年制の生徒として行動の基礎がしっかりしているということです。

ここで四大綱の一つである「チームワークをつくる」について補足しておこうと思います。チームワークというとスポーツの団体戦がすぐ思い浮かびますが、これは何もスポーツの場面だけでなく、日々の学校生活全般に言えることなのです。私は仲間と活動する意味をよく「一人では到達できない領域に行くため」と言っています。なぜそう思うかと言えば、仲間といると自分にはない熱量をもらえる可能性が増えると考えているからです。君たちは確かに物理的な熱量を持っていますね。気づいている人もいますが、私、ものすごく寒がりなので君たちが五月の初旬にすでに

ジャケットを脱いだり早くも夏服に着替えたりしていても相変わらず冬服を着ています。夏服の諸君は真夏をどう乗り切るつもりなのでしょう。廊下ですれ違う生徒諸君に「君たち、寒くないのかね？」と聞いたりしますが、「先生、教室は暑いんですよ」と多くの生徒が言います。確かに人一人 100 ワットと言いますからね。30 人から 40 人近くもいたら教室も温くなるはずです。ただし、今私が言っている熱量というのは体から出る熱のことではなく心からほとばしる情熱のことです。情熱も心的熱量ですから一種のエネルギーです。物理法則にしたがえば、熱は高温側から低温側へ移ります。情熱を持った友人がそばにいただけで、君たちはその人からエネルギーをもらっているのです。それは自分一人では生み出すことのできないエネルギーです。もしも情熱を持った人が何人か集まったとしたら、押し競饅頭のように、相乗効果で情熱は温度を上げることでしょう。人間には、特に君たちのように少年から青年になる若者には、情熱に触れると情熱で応えようとする心が備わっていると私は思います。「チームワークをつくる」とは、情熱を持った友人のそばで、その情熱に応えようと頑張ること、そう考えてもよいのではないのでしょうか。もちろん、やがて君の中の情熱が大きくなり、君の情熱に応える人が出てくるわけですね。

今週のおすすめ

・シュトルム 『白馬の騎手』 高橋文子訳 （論創社）

テオドル・シュトルムは 19 世紀のドイツの作家。本業は法律家。彼の作品で最も有名なのは『みずうみ』でしょう。私の年代で文学に興味のある人なら、高校生から大学生にかけてこの作品を読んでいない人の方が少ないのではないかと思います。まったりとした恋愛小説です。恋をした女が別の男性と結婚し、実はその女もそのことを後悔しているものの、もう元へは戻れない。このモチーフは世界各地にありますね。昔の恋愛小説は書かれた年代を考えて読まない、展開がまどろっこしく感じるかもしれませんが、それは読み手が悪いのですな。

『白馬の騎手』はシュトルム晩年の作品。これ、ちょっとタイトルが内容をミスリードするかもしれませんが、読む前に。原題を直訳すると「白馬に乗る人」で、騎士道物語とは無縁のお話です。学生時代に先生の輪読会に出席していたという個人的な思い出のある作品で、それでこの GW に読み直してみたのです。北海がどこにあるのか、フリースラントがオランダと北ドイツの北海沿岸を指すとか、当時沿岸の堤防の建設が住民にとって命に関わる大事な事業であったこと、それゆえ堤防を監督する立場の人間は地元でも尊敬されるべき大名士であったこと、また、当時の風俗として幽霊や人柱の伝説があったこと、これらの基礎知識がないと計算の得意な少年が長じて堤防監督になり…といったお話にしか読めないかも。なんせ、これが書かれたのは日露戦争の前ですからね。読み終わった後、いくつもの「？」が浮かぶと思いますが、また大人になって読み返してみて下さい。解消される「？」と新たに生まれる「？」があって面白いから。それが長く残る文学作品の特徴ですよ。

BGM は SEKAI NO OWARI の *Umbrella* でした…。